

人生 8 勝 7 敗 最後に勝てばよい (39)

人間学科共通科目「人間学」講演

人生 8 勝 7 敗 最後に勝てばよい

尾 車 浩 一

日時：2016年6月23日午前9時

会場：創価大学 S201教室

みなさん、こんにちは。ただいま紹介を頂きました尾車でございます。今日は、文学部1年生のみなさんにお話をさせて頂くということで、創価大学に来させて頂きました。先ほど、私の現役時代のビデオを見て頂きましたが、私が相撲をとっていた頃は、みなさんはまだ生まれていらっしゃらないと思います。実は、この創価大学の近くには何度となく足を運ばせて頂いておりましたが、その度に、正門の方から校舎の方角を見て、「創大で自分のことを語れるような人生に」と思ったことが何度もあります。今日は、私自身も夢が叶い、感無量の気持ちであります。

昭和60年の引退後、本業は大相撲としながら、それ以外にも、NHKの解説、また日曜日の夜に放映されているサンデースポーツという番組にて、大相撲の解説をさせて頂いております。そういうわけで、全国の多くの大相撲ファンの方から「尾車親方の話を聞いてみたい」と、全国各地に呼んで頂き、これまで2000回を超えるほど、全国で講演をさせて頂きました。現在もお話を頂いており、いろいろなところで講演をさせて頂いております。私としては、「今日のために、2000回の講演があったんだな」と思っておりまして、今日は一番力が入っています（拍手）しかし、力が入りすぎてボカをするということはよくありますから、「最終的に親方は、僕たちに何が言いたかったんだろう」とならないようにお話をさせて頂きますので、そのあたりは私

の気持ちを汲んで頂いて、ご容赦頂ければと思います。

傷だらけの勲章

先ほど見て頂いたビデオにあったように、現役時代の体重は、165 キロくらいありました。一番腫れ上がった時は、175 キロありましたが、現在の体重は95 キロほどです。14歳で入門した当時は105 キロだったので、35年ぶりに、100 キロを切ったことになります。100 キロを切るなんてありえないと思っていましたから、つるしの服があう、といろいろな所で感動しました。小錦さんが入るようなパンツが既製品として売っている両国には、大きいものになると8Lなどが売っているのですが、私も、いつも両国で5Lやら6Lやらの服を買ってありました。それ以外のお店は、どこに行っても入らないというのがほとんどでしたが、今は両国にいくと「ちょっと親方大きいね」と言われ、とても嬉しくなるんですね。

怪我をしたこともあり、それくらい痩せました。「痩せた」というか「しぼんだ」と言えるかもしれませんが、もう今では、稽古場で若い衆に自分の裸は見せられません。稽古場には、たいてい大きな姿見がついていますが、相撲取りは、その鏡で肩の筋肉などをクッと見て、自分なりに稽古の成果を感じながらやっていくわけです。私などは、風呂場で裸になると、もうシワシワで、相撲をとっていた頃の自分はどこにいったんだ、というのが正直な気持ちです。名残と言えるのは、歪んでしまっている指くらいですが、これは、悪いことをして歪んだわけではないんですよ。(笑) 先ほどビデオで見て頂いたように、相撲をとる時は、しっかりと回しをにぎり、上手をとって相手をひきつけることが重要なんです。「うわて」と書いて「じょうず」とも読みますが、それほど相撲においては、上手をにぎることが大事なんです。反対に、「したで」と書いて「へた」と読みますが、下手はだめなんです。下手から技を繰り出すと、うまくいかない。相撲は強くならないんです。非常に単純なようですが、相撲は単純だから難しいんで

す。そのような練習を連日行う中で、指は、にぎりしめたままのような格好に歪んでしまうんです。逆に言えば、これは勲章です。歪むまでやらなくては、人には勝てない。強くはなれない。

叶わない夢はない

私は、相撲を通して、楽して強くはなれないということを知りました。「格好良くありたい」、「楽をしたい」、「出世したい」、「人から良く思われたい」、これら全てを叶えることは無理です。勝ちたいなら、出世したいなら、どうしなければならないか。それは、人よりきついことを我慢するしかないんです。私は、楽して良い思いはできないということ、また、自分の目標を達成するには、人よりきつい思いをするしかない、ということ、相撲を通して知りました。

それと同時に、相撲は、どんな夢も叶わないことはない、ということも教えてくれました。例えば、野球の場合、高校野球の大会を見に行ったスカウトマンが、プロで通用すると思う選手をドラフト会議にかけるわけですが、スカウトマンが思った通りに、どの選手も活躍するのでしょうか？ドラフト1位だったとしても、活躍できない選手は多くいますし、逆に、ドラフトにかからなくても、練習生から超一流になった選手もたくさんいると思います。相撲も一緒なんです。「こいつはものになるな」と思っても、ものにならない場合が多くあるんです。そうかと思うと、マロングラッセに気を引かれてわけもわからず力士になったのに、大関になった私のような人間もいるんです。

私は、自身が身をもって体験した人間の潜在能力の奥深さを通して、人が他人の能力を簡単に見抜くことはできない、ということをお伝えしたいんです。要するに、どんな夢もあきらめることなんかない、ということです。例えば、試験をすれば、みなさんに1番から300番までの順位がつきますが、社会に出ても、その1番から300番までの順位は変わらず、そのまま人生が

終わるのかというと、そんなことはありません。例えば今は1位でも、油断をしていると、社会に出たら、あっという間に300番に落とされてしまうこともあります。逆に言えば、300番だからってあきらめることはありません。1番になるんだという思いを忘れなければ、いつか必ず1番になります。人の能力というのは、本当に奥が深いんです。

しかし、世間というのは、単純で非情なものです。例えば、みなさんが10年後、素晴らしい大臣か何かになり、私を訪ねてきてくれたとします。そして、私に「親方の話を10年前に創大で聞いて大感動して以来、やる気が出て今日まで頑張ってきました」と名刺を渡してくれたとします。その時、私はきっと「あなたのことを覚えています。他の子はボーッとしていたけど、あなたの目だけは鋭かった」なんて勝手なことを言うんですよ。それが世の中です。私たちもそうでした。出世すると、新聞記者が「琴風のことは、下のうちから見ていたけど、こいつは絶対出世すると思った」なんて言うんです。

でも、そんなのは全部ウソです。私も、現在弟子をたくさん預かっています。でも、どれが出世して、どれが出世しないかなんてわからないですよ。わかっていたらスカウトなんてしないし、弱い相撲取りなんて出ません。勝負をするのが相撲の世界なんですから、全員強い相撲取りだ、と連れてきても、半分は負けるんです。残念ながら、一生懸命やったことが報われない相撲取りが、毎日半分いるんですよ。

力士としての心構え

少し話はそれますが、先ほども、私が行う相撲の解説はわかりやすく好評を博している、と紹介して頂きました。今日は、みなさんにだけ打ち明けますが、解説の時、アナウンサーの方に「今場所の優勝争いは、どんな展開になっていくのでしょうか」と聞かれると、私はいつもこう言うようにしているんです。「初日の相撲を見た限りでは、やはり横綱を中心として、大関があとを追いかける形になるんじゃないでしょうか。ただ、三役陣が活躍する

場所は面白いと言いますから、三役陣にも注目しましょう。しかし、勝負ごとは最後までわかりませんから、予想もつかなかったような力士が優勝することもあります。15日間、楽しみに注目していきましょう」ということかという、誰が優勝しても当たるようになっているんです。(笑)「親方が言った通りだ!」と言われますが、どうなっても当たるように保険をかけているわけだから、当たり前です。実は、解説というのは簡単なんです。だから、私たちの世界では「相撲取りはやめたら相撲が上手くなる」とよく言ったものです。口でとると、いくらでも勝ちパターンを考えられるけれど、自分で相撲をとると、口でとるほど上手くとれない。どちらも勝つ方法を考えて土俵に上がるけれども、勝負の世界では、どちらかが負けないといけないんです。

もっと言えば、考えて相撲なんかとれないんです。あつという間の何秒間に、「右の上手とるんだ」、「左の上手とるんだ」、「頭つけるんだ」、なんて考えてできないんです。日頃の稽古で体が覚えたことを無心でやるだけなんです。勝敗は、なるようにしかならないということです。ただ、「やるだけやりましたから、悔いはありません」というのは、プロの世界では通じません。そんなことを口から出した日には、師匠は大雷ですよ。「何のために稽古してきたんだ。負けて悔いが残らないんだったら、相撲取りなんてやめちまえ」と、こうなるわけです。だから、相撲取りはインタビューを受けても、「はあはあ、まあ頑張ったんです」と余計なことを言わないようにしているんですね。爽やかに「いやあ、やるだけやりました」なんて言ったら師匠に怒られるから。(笑)

勝負の世界とは

私が優勝決定戦の一番に臨んだ時、師匠は私の支度部屋に来てこう言いました。「お前、今まで何やってきたんだ。わしにどれだけ殴られてきたんだ。どれだけ怒鳴られてきたんだ。どれだけ苦労したんだ。どれだけ痛い目にあっ

たんだ。全部出してこい」この師匠からの励ましを受けて、「くそ！」との思いで土俵に臨んだのを覚えています。勝ったら優勝するなどというようなことは、考えもしませんでした。

師匠からの指導の一つに、「一生懸命やって強くなったやつはいない。強くなるまで一生懸命やるのだ」というものがあります。要するに、我々が思う「頑張った」で渡れるほど世の中は甘くない、勝つまでやらなければ、頑張ったと言うことはできない、ということです。厳しい指導かもしれませんが、当たり前と言えば、当たり前のことでもあります。

ただ、相撲界は少し原始的なところがありますので、今日の私の発言は、相撲界の中でしか通じないことだと思って聞いて頂ければいいですよ。相撲界では、「世の中の常識は相撲界の非常識」のようなところがありますからね。

例えば、私も何回も怪我しました。膝の靭帯も切りました。半月板もちぎれてありません。指は全部曲がりました。足の指もあっち向いたりこっち向いたり、変形ばかりしています。肘はというと、左の下手をさしたり、右の上手からおっつけられたりすることで、固まって曲がらなくなりました。だから、右の手は口まで持ってくるのができません。あっちもこっちも怪我しています。しかし、「痛い」などと言うと、師匠から「痛い？ 痛いことやっているんだから、痛いに決まってんだろ。お前だけ気持ちいいことやらせてるんじゃないんだ」と檄を飛ばされます。これが、親方が唯一弟子を励ます言葉なんです。風邪引いた時も、「病院へ行ってきます」と言うと、「風邪引いてるのはお前だけじゃねえか。風邪引いたら稽古休んでいいのか？ 医者言うことなんか聞いてたら殺されるぞ、稽古して汗かきゃ治るんだ」などと、わけのわからないことを言われるわけです。私も、弟子たちに同じようなことを言いますが、風邪はウイルスが原因なんだから、気合いじゃ治らないということは百も承知しています。(笑)

しかし、これが、師匠から教わってきたことなんです。どういうことかという、負けた時に、「足を怪我していたから」「今風邪を引いていて体調が

悪いから」と、勝てなくても仕方がないと思ってしまうと、その「仕方がない」という気持ちで、相撲に出てしまうんです。仕方がない相撲人生になってしまうんです。だから、「仕方がない」ではなく、「なんで足を怪我してしまったんだ」「なんで膝の靱帯を切らなければいけなかったんだ」「なんで俺だけ今風邪を引かないといけないんだ」「こんな大事な時に、なんで俺だけ熱出すんだ」「なんであんな相撲を取ってしまったんだ」と、自分で悔やまないといけないんです。常に、「なんでなんだ」と自分の中で戦わないと意味がない。自分で「仕方がない」と思うならば、勝負の世界に入ってきたって、仕方がないですよ。

14 歳での入門

私は、14 歳で入門し、相撲の世界に飛び込みました。強くなるなどとは夢にも思わなかったですし、考えも及びませんでした。1 日を生きていくのが精一杯で、目の前で稽古というものを見せられただけで逃げ出したくなりました。相撲というのは、直径4メートル55センチの小さな土俵の中で行うスポーツですが、皆さんもご存知の通り、ルールはとても簡単です。俵から足を出したら負け、土俵の中で手をついたら負け、投げられたら負け、というように、勝ち負けが嫌でもわかるスポーツなんです。あの俵の中心には、仕切り線が引いてあり、この間は70センチ開いています。この70センチを挟んで、ドーンと頭でぶつかり合うことを「ぶちかます」といいます。脳天で当たると頸椎がやられてしまうので、怖くてもあごを引いて、生え際でダーンとぶちかましていかないといけないんです。幕内力士がぶちかます時の時速は平均120キロと言われています。当たった瞬間にかかってくる圧力は1トンもあるんです。このような稽古を見せられて、14歳の子供が「よし、俺もこうなりたい」と思うのでしょうか。逃げ出したくなるのが普通ですよ。もし、「次は俺が当たる番だ」なんて思ったら、おかしいでしょ。私も、それはもう逃げ出したくて仕方がありませんでした。逃げ出さなかった理由

は、14歳の当時、三重県の津へどうやって帰ればいいのかわからなかったからです。お金もなく、ただ居ついたというのが最初の頃の思い出です。ですから、「頑張った」などというのは、ずっと後の話です。まずは、そこに居つくことから、そこからのスタートだったように思います。

相撲界の「常識」

現在は暴力禁止の世の中ですから、相撲の世界でも、そんなにビシバシ叩いたりしてはいけないことになっています。しかし、それはそれで難しいところもあります。もちろん、叩きたくて叩いているわけではありません。昔は、腰が高いというと「腰が高いんだ、下ろしていかなか」とお尻を青竹でバシーンと叩かれたり、「あたりが悪いんだ」と頭をバシーンと叩かれたりしていました。振り返って思い返すと、私の師匠は今頃生きていたら懲役に入っているなと思います。(笑) 私も、叩かれるだけ叩かれて、さあやっと叩く番になったと思ったら叩くと言われて、俺の人生損じゃないか、と思いますよ。(笑)

なので、今はきつい言葉で教えるというのが事実です。「この野郎」や「オラ！行け！出ろ！」など、きつく聞こえるかもしれませんが、稽古で力を出している時には、それくらいの言葉を発しないといけないんです。相撲の世界では、前へ出るということが一番大事なんです。引いたり、はたいたりして勝っても力はずかないので、苦勞して勝つことを稽古場で覚えなさいといけません。もし相手から、はたかれそうになっても、それを自分で起こして土俵の外まで持っていくような力を出さないと、強くならない。だから、「出ろ、出ろ！」「もういっちょ！自分から！」「人に言われて行ってしまうんだ、それで強くなるのか、馬鹿野郎！」と声をかけて稽古をするんです。

少し気を許せば大怪我につながるような稽古をしているわけですから、これも暴言だと言われてしまうと、相撲界では通じないんです。私も経験者だから、弟子の顔を見て何を考えているかわかる時があります。朝、稽古場に

行くと、「稽古やりたくないな」「今日は嫌だな、さぼりたいな」というオーラを出している弟子がたくさんいるわけなんです。こういう時に、怪我につながるんです。だから、「ちょっと来い。なんだ、その寝ぼけた顔は。氷水で顔を洗って出直してこい!」と、気合いをいれてやって稽古をさせるんですね。1回怪我をすれば、1年、2年棒にふることになりますし、さらに言えば、相撲人生を失くしてしまうことになります。だから怒るんです。これが稽古中に、「いい相撲だったね!もう一番行ってみるかい?」なんてことを言っていたらどうですか。(笑)「今日はどうしたんだい?顔が眠たそうだぞ。そうだな、朝早いからな。じゃあ、もう寝てなさい」こんなことを言っていて、強くなるわけがないじゃないですか。(笑)相撲が全てではありませんが、このようにして、私は育ってきました。厳しい方法ではありますが、それはそれでありがたかったかなと思っています。

怪我で味わったどん底

私は、先ほどご紹介頂いた通り、自分なりに苦勞し、人に負けないだけの稽古を積み、その結果として幕内、三役、そして大関という地位にして頂きました。しかし、ずっと良いことばかりだったわけではありません。「あの人はずっといいな」と思われるような人こそ、裏には、常に努力があることを忘れてはいけません。ただ、努力をしても、谷底に落ちることは多々あるわけです。私も関脇だった時、膝の靱帯を切る怪我をしてしまい、幕下まで落ちたことがあります。それは、怪我をしたから落ちたのではなく、怪我をしたことで相撲がとれない、すなわち、大相撲5月場所や7月場所という勝負の場所に出場できなかったから、落ちたんです。休場するということは、相撲の世界では負けになるんです。野球では、1年休んでも、半分になった年俸をもらえと思いますが、相撲の世界では「全敗」として落ちていくしかないんです。怪我で休場をする場合、これは名誉の負傷ではないかと思いますが、相撲協会の言葉を借りれば、「7月に大相撲場所があることは去

年から知っていましたよね。全員が伝染病みたいに怪我をするのであれば、こちらとしても落としますが、7月場所に照準を合わせて出てこれない方が悪いのです。次の力士はいくらでもいるので、嫌ならやめてもらっても構いません」となるわけです。

だから私も、下まで落ち、また、そこからやり直すことになりました。しかし、やり直すとは言っても、靱帯切断というハンデを背負っているわけですから、簡単にはいきません。足の関節がゆるくなってしまう、左足は力が入りませんでした。しかし、足に力が入らないんだから負けたって仕方がない、では通じない世界です。足に力が入らないなら、何か違う相撲を覚えるしかないんです。親方と話し合って、次の相撲を覚えたわけではありませんでした。

大相撲の世界には、落語や歌舞伎の古い世界のように、付き人修行というものがあります。関取になると、付き人がついて、いろいろな身の周りの世話をしてくれるんです。みなさん、居酒屋に貼ってあるような「番付」というものを見たことはありませんか。番付の1段目に大きな字で書いてある力士が40人います。2段目の右端に10人だけ少し大きな字で書いてある力士を「十両」といいます。「十両」に上がると関取になるんですが、現在、700名弱いる力士の中で、十両は28人、関取と呼ばれるのは68人です。残りの600名ほどは若い衆ですから、簡単には「下っ端」といいます。下っ端の人たちは、この68人の付き人をしないといけない。例えば、稽古中に汗をかくと、付き人がバスタオルで体をふいてくれます。お風呂に入ると、付き人が全員でこすってくれるんです。私も、三役の関脇の時には、5人の付き人がいました。なので、お風呂では付き人の5人が、右手、左手、右足、左足、背中、とこすってくれるんです。気持ちいいですよ。(笑) これが大関の時には、15人の付き人がついていました。15人もいると、足の指を1本ずつこすってもらっても、まだ5人余る計算です。(笑)

しかし、相撲の世界では、番付が落ちると、また付き人に戻るんです。相撲の世界は、番付で順番が決められているので、「元○○」は通じません。私も、

関脇から幕下まで落ちました。その時、当時私の付き人をしていた力士が十両に上がっていたので、私は、自分の元付き人だった力士の付き人になりました。元付き人の手足を「失礼します」と言って洗ったんです。悔しいし、情けないし、惨めでした。正直に言うと、泣きました。足の回復も思わしくないし、こんな辱めに遭うんだったら、もうやめようかな、と何回も思いました。しかし、やはり師匠からの励ましがあり、良い方向へ、と道をつけてくれました。みなさんにとっての指導者は、創価大学の教授であったり、身近にいる親御さんであったり、創立者の池田先生であると思いますが、私の師匠は、先代佐渡ヶ嶽親方（元横綱琴桜）でした。当時は、恥ずかしいし、みっともないし、この足では力も入らないから勝てるわけがないし、もうやめようか、と思っていました。私も、常に頑張っていたわけではありません。何回も落ち込みました。しかし、指導者というものは、本当にありがたいものだと思います。

師匠の励まし

当時、私は稽古もできずに目標もないような顔をしていたんだと思います。そういう時、師匠というのは、ポンと背中を叩いて、「お前だけが苦しいのか。違うだろう。お前のことを心配しているご両親や、ファンの人もたくさんいるだろう。お前のことを応援してくれている人が大勢いるんだから、今諦めてどうするんだ。親方もついていないじゃないか。少しずつでいいんだから、1歩1歩前向いて頑張ろうじゃないか」…と、こういう励ましが普通だと思いませんか？しかし、私への励ましは、そうではありませんでした。師匠は、ポンと私の背中を叩いて、「泣いて勝てんならずっと泣いてろ、この野郎。嫌ならやめてけ。てめえなんかいなくなつて、ちゃんと切符売れてんだよ」と、私はこのように温かく励まされました。(笑) 私も、20歳で関脇、次は大関、というところまで上がっていたんです。当時、大横綱だった北の湖に連勝して「北の湖キラー」なんて言われて、ちょっといい顔をしていた

んですね。それが、「お前なんていなくても困らないんだよ」はひどいだろう、と思いました。正直、「覚えとけ、お前を信じてついてきた俺がバカだったよ、俺の青春を返せ」と思いました。14歳でマロングラッセに騙されてから、嫌というほど稽古して、腰が高いだの当たりが悪いだの怒られ、その度に叩かれて、指は曲がるわ、膝の靱帯は切れるわ、体はズタズタになるわ、俺の人生潰しておいて、それで今の言葉か、と思いました。

その時、悔しくて悔しくて、「もうお前なんか師匠でも何でも無い。お前のことなんか信じてきた俺がバカだった。お前なんか言われなくてもやってやる」と思ったんです。もちろん口に出しては言っていません。そんなことを口に出して言った時には半殺しになっていますから。(笑)

そして、もう1回やりました。一度切れてしまった靱帯が再生するような奇跡は起こらないので、周囲の筋肉で靱帯が切れた分を補うしかないと思いました。私は、先にトラックのタイヤをしばりつけたロープを自分の回しにくくりつけ、毎日毎日、部屋の前の道路をトラックのタイヤを引っ張って往復しました。「ちきしょう、ちきしょう、親方なんか言われてたまるか、見とけ」と、自分にけんかを売るような気持ちで、毎日タイヤを引っ張りしました。

どん底からの再起

タイヤを引っ張っていたら、膝に靱帯を保護するだけの筋肉がついて、また土俵に上がって頑張れたという話ができればいいのですが、そんなに甘くありません。実際はどうなったかという、靱帯が切れた膝に毎日のように負荷をかけるわけですから、膝に水がたまり腫れ上がってしまいました。朝、腫れ上がった膝がジンジンと痛んで、立つことも起きることもできないんです。その時、『『人生は努力すれば何でも叶う』、『一生懸命やれば必ず結果はついてくる』、などと格好いいことを言うけれど、そんなに世の中甘くないじゃないか』と思いました。私は、腫れ上がった膝をさすりながら、「俺も

一生懸命やったじゃないか。頑張っているじゃないか。でも、結局なにも変わらないじゃないか。逃げ出したとか、ダメ人間だとか、言いたいやつは言えればいい。人になんと言われようが、もう俺は田舎に帰る」と、何回もやめる決心をしたんです。

その時、99.9%やめるつもりでした。しかし、0.01%私を思いとどまらせる何かがあったんです。私が「やめよう」と思うたびに思い浮かんでくるそれは、私にボロクソ言った師匠の顔でした。「泣いて勝てるなら泣いてろ。てめえなんかいなくても誰も困らないんだ」と言っていたこの姿が思い出されると、やめきれなかったんです。やめきれなかった私は、膝の周りにアイスノンを5つも6つもしばりつけ、痛いのか冷たいのかわからないようにして、タイヤを引っ張り続けました。今も、膝には凍傷のあとが残っています。それくらいアイスノンをここに巻いて、私はタイヤを引っ張り続けたんです。

そうすると、本当に膝に力がついてきました。その時、もう一度復帰して自分が取れる相撲は、とタイヤを引っ張りながら考えたのが、「がぶり寄り」です。みなさん、大関琴奨菊をご存知ですか。私は「琴風」で、彼は「琴奨菊」、系列から言えば、彼は年の離れた弟みたいなものなんです。彼も、上体を揺すって前へ出て行くというがぶり寄りを得意としています。この技は、私が彼に教えました。私のように、横には大きいんですが、あまり身長がなく相撲が単調だから、琴奨菊にがぶり寄りを教えてやってくれと師匠に言われ、私が教えました。私は、この「がぶり寄り」という、膝が悪くても上体を使って相手を寄り倒す、寄り切っていくという相撲を怪我をした時に覚え、もう一度土俵に復帰してから、優勝し、大関になったんです。

なので、何か自分にとって不利なことがあった時、もうだめだと思った時、そんな時こそ、もう捨てるものがないから、これ以上落ちるところがないから、そこがチャンスなんです。そこで何かが変わるんです。私は、怪我をしていなかったら、三役で終わっていたと思います。怪我のおかげで、がぶり寄りという相撲、自分の相撲というものを見つけ、その結果、大関になることができたんだと、今でも思っています。

引退から現在まで

私は、大関を4年間務め、優勝を2回させて頂き、そして土俵を下りました。みなさんがまだ生まれていない昭和60年11月の本場所、3日目まで3連敗をし、当時の力士である寺尾に負け、これを最後に、引退を決意しました。この時、寺尾に負けた私は宿舎に戻り、親方の前に正座をして、「親方、長い間お世話になりました。今日で引退させていただきます」と、自分の思いを打ち明けました。すると、「なにが引退だ、この馬鹿野郎。あんな若造に負けて悔しくないのか。休んでやり直せ」と怒られました。しかし、その時もう私は決意していました。膝に水がたまってしまい、相撲をとることではなく、土俵に上がることが、もう辛いんです。膝が緩んだ足がふらふらして、とてもではありませんが、相手の当たりを受け止める、また弾き返すことができる体ではなくなっていました。

あの時、親方は、最後の最後まで、私に氣力を振り絞らせてやろうという気持ちで叱ってくれたんだと思います。しかし私は、15年間の中で、最初で最後、面と向かって師匠にたてつきました。それまでも、影では悪口を言っていましたよ。私は、「ちきしょう、あの野郎。いつか見てろ。引退したら、あいつの寝床に画鋏まいてやる」とまで思っていました。(笑) いつも怒ってばかりで、勝った時ですら、「明日が大事なんだ」などと言って怒るような親方でした。私が優勝した時は、三重県の津という当時人口が11万人だったところに25万人もの人が集まり、紙吹雪がフワッと舞う中、パレードをしました。その後、部屋に帰って師匠に、「おかげさんで優勝できました」と言ったら、親方は「おめでとう」とは言わず、「来場所が大事なんだよ。もう今日から来場所は始まっているんだ」と言いました。これが、祝福の言葉だったんです。残念ながら、これが相撲界というところなんですね。

しかし、私が引退を決意し、「やめます」と言った時、親方は「わかった、わかった」と2度言った後、目を閉じてポロポロと泣いたんです。そして、私に「よく頑張ったな。15年間、ご苦労さんだった」と言いました。また、「お

前が怪我した時、医者から、お前の膝はもう無理だから引退させてやれ、相撲をとっても勝てないと言われた。だけど、やめさせなかった。それは、お前に相撲を恨んで生きてほしくなかったからだ。絶対に結果は出るから、やらせたかったんだ」と、言ってくれました。親方は、「お前には、他の弟子の何倍も辛く当たってきた。でも、よく向かってきてくれたな」と、ボロボロ泣きました。最後に、「お前みたいな若い者に人の生き方を教わるのは残念だけど、今回は教わった。人というのは、素質でも、生まれつきでもなく、努力なんだ、やればできるんだって、お前の姿を見て思った。本当にご苦労さんだった」と言って、泣いてくれました。

その時、私も一生懸命やってきたけれど、叱りつけて叱りつけてやらせてくれた厳しい親方がそばにいてくれたから、今があるんだと感じました。自分だけだったら、とっくに尻尾を巻いて、逃げていただろうし、やめていただろうと思います。そう思うと、「厳しい」ということは、辛いし、面白くもないけれど、自分を成長させる一番のカンフル剤なんだということを、相撲人生を通して、教えてもらったと感じています。

それから、尾車部屋という部屋を創設し29年、いい人間を、いい力士を育てたいという思いで、時には厳しく接しながら、私も弟子を育成させて頂いております。こんなに優しく可愛らしい顔をしているのに、弟子は私を嫌がります。(笑) 弟子たちは、私がいないととても喜び、私が稽古場に行くと、一度に嫌な顔をします。「一番、私が弟子たちのことを考えてやっているのに」と思うこともあります。親になったら子の気持ちがわかる、とも言いますし、今弟子に、「本当に優しくいい親方です」などと褒めてもらっていたら、それは弟子の足を引っ張っていることになるんだな、などと思いながら、現在尾車部屋をやらせて頂いております。みなさんも、相撲をやれとは言いませんから、一度機会があったら見に来てください。(笑) 私の部屋でも、みなさんと同じような年頃の人が私に、ああでもない、こうでもない、と言われながら相撲をとって頑張っています。違う世界を見るというのも、なかなか良いことですので、ぜひ来てください。もしみなさんが来られ

ないなら、この創大の庭で合宿をさせてもらってもいいかなとも考えております。(笑)

更なる挑戦

先ほどのビデオの中にもありましたが、私は4年前にまた怪我をしてしまいました。脊髄損傷で首から下が全部麻痺をしてしまい、当時は体が全く動かなくなりました。「また、終わったかな」と、感じたこともありますが、相撲の人生を通じて覚えてきた「なにくそ魂」を燃え上がらせ、頑張るということは勝つまでやることなんだと、もう一度現役時代の気持ちを取り戻し、立ち上がるまで頑張ろうと、自身を奮い立たせております。私なりに、まだ道半ばで、毎日リハビリを続けておりますが、周りからは「奇跡だ」と言われるような回復をさせて頂いております。また、相撲協会の中では、一番重要なポストである、事業部長という肩書きで仕事をさせて頂いております。私は何回も断ったんですが、「親方しかいない」と言って頂き、千数百人の相撲協会員の上に立ち、両国国技館を守るために仕事をさせて頂いております。

このような仕事につくことができたのも、また信頼を得ることができたのも、やはり、あきらめないで続けてきたからこそだと思っています。みなさんには、これから、素晴らしい未来が広がっていますし、素晴らしい人生が待っていると思います。ただ、その素晴らしい所に行く過程で、「自分の人生なんか素晴らしくないんじゃないか」「自分の人生なんか素晴らしい所に到達しないんじゃないか」と思うことが多くあると思います。そんな時こそどうか、自分の目標とする所に辿り着くためには、努力が必要なのだという事を忘れないでください。「そんなことは当たり前じゃないですか」と言われるかもしれません。しかし、私たちもよく、『頑張っている』などと偉そうに言うんじゃない。頑張るのは当たり前だろう。相撲取りになって一生懸命やらなくてどうするんだ」と怒られたものです。一番大事なことは、あ

きらめないことです。どんな困難があろうとも、どうか自分を信じて、あきらめないで、自分の目標に到達して頂けたらと思います。

池田先生との出会い

私は、幕内という地位で相撲をとっていた頃、みなさんと同じ年齢の19歳の時に、創価大学の創立者である池田大作先生に初めてお会いしました。池田先生が、私のそばに歩いてこられ、そして私の顔を両手で挟みながら、「可愛い顔をしているね」と声をかけてくださいました。その時、私はどうしていいかわからず、ただ「はい」と言っていました。(笑) そして、先生は、先のことを見透かされていたように、さらに「頑張れるか。やっていけるか」と声をかけてくださいました。私は「はい!」と返事をしました。他の言葉は出てきませんでした。「無理かもしれません」とは、言えないでしょう。最後に、「いい奥さんをもらうんだよ」と言って頂きました。全てを見透かされているように激励をして頂いたのが、ちょうどみなさんと同じ19歳の時でした。

むすびに

それから40年が経ち、今59歳になり、まさかみなさんの前で私が歩んできた道についてお話しができるなど思いもしませんでした。45年もの年月を、1時間で全て語るのはなかなか難しいので、嫌でなければ、どうか第2弾、第3弾、第4弾と、また呼んで頂けたらありがたいと思います。最後に、相撲界の言葉をみなさんに贈って終わりにしたいと思います。それは、「土俵は人生の縮図」という言葉です。「押し出し」、「寄り切り」、「つりだし」で優勝した力士は大勢いますが、「肩透かし」、「勇み足」、「うっちゃり」で優勝した力士は1人もいないと言われます。どういうことかという、「自分で押していけ、寄っていけ、つっていけ、はたかれても、うっちゃられても、

勇み足をして、自分から前に出て、勝ちにいけ」ということなんです。引いたり、はたいたり、うっちゃったりと、人の力を利用して勝つことを覚えたら、いつまでたっても強くなりません。土俵は人生の縮図なので、このことが人生にも当てはまるという相撲界の言葉です。力士になれなどというようにことを言う気はさらさらありませんが、また相撲を見たら、「親方があんなことを言っていたな」と思い出してください。引きたくなる時や、はたきたくなる時があるかと思いますが、半歩でも、4分の1歩でも3分の1歩でも、苦しくても前に出るような成長を、また勉強をして頂ければありがたいなと思います。これからもみなさんが健康で元気で、そしてはつらつと前に向かっていくことを願い、私の話を終わらせて頂きたいと思います。本当に長時間、ありがとうございました。(大拍手)

《司会》：尾車親方、本当にありがとうございました。5分ほどございますので、質疑応答に移りたいと思います。

《学生》：ありがとうございました。今日は、尾車親方にお礼が言いたくて来させて頂きました。長い間、辛いことや苦しいことがあったんですが、尾車親方の取り組みを見て、いつも元気をもらっていました。本当にありがとうございました。今日は、お会いできて本当に嬉しいです。がぶり寄り、本当に素晴らしいと思います。私は、今教師を目指しているんですが、子ども達にこれは教えていくべきだ、ということは、何かありますか。

《尾車親方》：私のことを知ってくれていて本当にありがとう。やはり、相撲の世界では、徒弟制度のようなところがありますが、自分の考えや思っていることを、封じ込めるのではなく、引き出してあげる、口から出させてあげることが大事だと思います。相撲の世界も、

「親方に言ったら、怒られるだろうな」というようなことは、たくさんあります。しかし、それは言ってもらわないとわからないから、私もいろいろな形で言い出せるような雰囲気を作り、弟子から聞くようにしています。例えば、お酒を飲んで酔っ払ったふりをしながら、「言いたいことがあったら言え」と言って、弟子に思っていることを言わせてあげます。子どもが言うことは、間違っていたり、甘かったりすることがあるかもしれませんが、一番いけないことは、それを封じ込めてしまうことだと思います。だから、どんどん思っていることを出させてあげて、それを矯正し、次の道へ進めてあげる、まっすぐな道に戻してあげるというようなことができればいいのではないかと思います。そんな、何でも聞き出してやれるような先生になってください。

《学生》：サンデースポーツ、毎回拝見しています。親方の講義の中で、「厳しさが一番のカンフル剤」という言葉がありましたが、「褒めて伸ばす」ということについては、どう思われますか。

《尾車親方》：ありがとう。「褒めて伸ばす」ということは、大事なことだと思います。ただ、褒めるということが、何を褒めるのか、ということ、指導者は気をつけないといけないと思います。何でも「良かったよ、良かったよ」と褒めて、全然成長していないのにその気にさせてしまうのは、どうかと思います。例えば、「今日は良かったけど、ここを直せばもっといいんじゃないか」というように、教えてあげたらいいんじゃないでしょうか。もちろん、私たちもいつも「馬鹿野郎」ばかり言っているわけではありません。そのように言う方が多いことは事実ですが、相撲界では、「馬鹿野郎」や「この野郎」というのは、接統詞なんです。(笑) なので、若い衆は、怒られてもけっこう何とも思っていないんですね。昔、

親方に、「てめえこの野郎、強くなりやがったな、この馬鹿」と言われたことがありますが、これは、褒められていたんですね。(笑)

今は、そこまでは言いませんが、相撲の世界にはそういうところがあるんです。確かに、褒めるということを忘れてはいけないと思います。ただ、本人が辛い時に、どんな言葉をかけてやるのが一番いいのか、と考えた時、「大丈夫、大丈夫」という言葉は本当にいいのだろうか、本当に、「大丈夫」と言われて大丈夫なんだろうか、と思います。言う方は、責任を持って、声をかけていけないといけないので、何でも「大丈夫だよ」と褒めてしまうのは、私は違うんじゃないのかなと思います。大事なことは、「こうしたら大丈夫、こう考えたら大丈夫」というように、右へ行くのか左へ行くのか、まっすぐ行くのか、という道標をつけて、褒めてあげることだと思います。「褒めて伸ばす」というのは、とてもいいことだと思うので、私も、「この野郎、強くなったじゃないか。やればできるじゃないか、このバカ」と褒めているんです。(笑)

しかし、相撲界の通りにしてはいけませんよ。学校の先生になったら特にいけません。生徒が風邪を引いて欠席すると言った時に、「なにが熱だ。医者 of 言うことを聞いていたら殺されるぞ」と、尾車親方が言っていた、などとは言わないようにしてください。(笑)

私は、相撲界の話をしただけですからね。つまり、「褒めて伸ばす」ということは大事ですが、ただ、やみくもに褒めるというのは間違いじゃないかなと思います。

《司会》：名残惜しいですが、時間が来てしまいましたので、ここで学生から感謝の思いを込めて、尾車親方に花束の贈呈をしたいと思います。尾車親方、ご講演大変にありがとうございました。